

自殺許容意識を規定する要因

——地域とのつながりとの関連

渡辺 由希

1. 問題

我が国において、自殺が社会問題となって久しい。平成 27 年度の厚生労働省自殺対策推進室による自殺統計によれば、年に 24,000 人以上の人々が自ら命を絶っている。小森田 (2013) は、特に若者～中堅層 (20～30 代) の自殺者数は他の世代に比べて上昇傾向にあると述べている。こうした社会背景を受け、国による「自殺総合対策大綱」の見直し案である「自殺総合対策大綱～誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して～」(平成 24 年 8 月閣議決定) では、若年層への取り組みの必要性・重要性について見直された。

このように我が国において重要な社会問題となっている自殺であるが、これに対する先行研究は社会学・心理学・医療分野等で主に行われている。自殺の社会学的研究として先駆的であったのはデュルケムの『自殺論』であろう (Durkheim, 1897; 宮島, 1985)。デュルケムは欧州の統計資料をもとに自殺を類型化し、社会的要因と自殺率との関連を論じた。一方心理学や医療分野では、自殺企図・自殺念慮といった個人の意識に着目し、予防的観点からこころの病との関連や自殺企図 (あるいは自殺念慮) を抱きやすいパーソナリティとは何かを明らかにしようと試みている。しかしながら、デュルケムの自殺研究に対してギデンズは次のように批判している (Giddens, 1977; 宮

島・江原・森反・儘田・本間・田中・百々,1986)。

デュルケムは、自殺率のパターンの社会学的説明を補足するものとして、自殺の説明における心理学理論の役割を承認する。けれども(a)心理学と社会学の説明についてのかれの解釈は適切とはいえない。かれによれば、後者は自殺率を左右する社会的諸条件をあきらかにするのに役立ち、それに対し、前者は、それらの条件のなかで自殺する個々人ないし個人のタイプを明らかにするとされる。それゆえ、たとえばアノミー状況が自殺におよぼす影響を決定するのは社会学的分析の課題であり、心理学理論は、なぜこうした状況のもとで個人Aは自殺をし、B、C、D……はしないのかを説明するということになる。しかしながら、これは、個人のパーソナリティにおける「自殺傾向」の原因が純然たる生物学的なもので、社会的諸条件とかかわりがないというならともかく、そうでないかぎり満足な観点とはいえない。(Giddens, 1977; 宮島ら, 1986; p.262)

以上のギデنزの批判から、自殺とは、社会的要因と個人的要因の2つの要因が影響した結果の現象であり、どちらか一方を自殺の要因とすることは不十分であると言える。ただし、デュルケムやギデنزが述べる社会的要因は、あくまでも社会集団(家族、宗教集団等)への所属の有無であると平野(2013)は指摘している。平成19年度国民生活白書によれば、地域の近隣関係のつながりの浅さ、地域活動(自治会等)への参加率の低さ等が明らかとなり、地域のつながりの希薄化が年々深刻化していることが報告された。希薄化が深刻であるとするならば、社会集団への所属の有無のみならず、社会(集団)と個人とを結び付けているつながりの強さへと着目し、地域とのつながりの強さと自殺との関連を検討することが必要であると考えられる。また、近隣関係のつながりや地域活動への参加といった社会的要因と影響関係にある個人的要因として考えられるのは、地域に住む人々への関心である。滝澤・若林(2013)は、退職男性の地域活動グループへの参加を事例に、

グループ活動が推進された要因の1つとして、「肩書きにこだわらずに互いをよく知ることを挙げている。滝澤ら（2013）は、地域活動グループが形成される段階で、参加メンバーの一人ひとりが肩書きにこだわらず、どんなことに興味関心があり、どんなことを考えているのか、その人物像を相互に捉えることのできる活動が、その後のグループ活動を左右すると考察している。このことは、住民がともに地域活動に参加することで、参加者の間で互いに関心が高まっていたことを示唆するものである。

以上のことから本研究では、自殺に影響する要因として社会的要因と個人的要因の2つを設定するとともに、社会的要因を地域社会と個人の間をつなぐ強さをあらわす要因とし、個人的要因を地域に住む人々への関心、すなわち他者への関心をあらわす要因とする。地域とのつながりを持つことが個人の意識に影響を与えたという滝澤ら（2013）の先行研究から、[社会的要因] → [個人的要因] の影響関係が想定でき、また個人の自殺に対する意識が自殺行動に影響を与えることが先行研究（Renberg & Jacobsson, 2003）から明らかにされていることから、自殺は個人的要因に影響を受け、[個人的要因] → [自殺関連要因（自殺行動や自殺意識）] という影響関係が成立する。よって、個人的要因を媒介とした [社会的要因] → [個人的要因] → [自殺関連要因] という影響関係が成立すると考えられる。

2. 目的

本研究は、自殺という現象を社会的要因と個人的要因の2つの側面から捉え、社会的要因が個人的要因に影響を与え、さらに個人的要因が自殺に影響を与えるという仮説、すなわち [社会的要因] → [個人的要因] → [自殺関連要因] の因果関係を検証する。特に自殺者数が増加傾向にある若年層（20～30代）に着眼する。

本研究における社会的要因は、地域とのつながりにかかわる変数であり、「地域活動への参加」、「近隣との付き合い」の2変数を設定する。個人的要因は、これら地域とのつながりから生じる変数であり、「他者への関心」を

設定する。自殺関連要因に関しては、個人の自殺に対する許容意識が自殺行動に影響を与えるという先行研究 (Joe & Jamieson, 2007 など) があることから「自殺許容」を設定する。自殺許容という意識に着目することで、自殺に対する間接効果を期待するものである。

3. 調査概要

3-1. 調査対象者

本研究は、自殺という侵襲性の高いテーマを扱うため、従来の紙媒体による調査ではなくインターネットによる調査を行った。研究の実施にあたっては、「淑徳大学研究倫理規準」に基づいて倫理的配慮を行った。回答者には、調査に回答する前に本調査のテーマが自殺に関するものであることを知らせ、それに了承したうえで回答者は調査に協力（あるいは了承せずに非協力）することが選択可能であった。

調査は株式会社マクロミルに発注した。調査対象者はインターネット調査であることを考慮し 20～59 歳までの男女とし、2010 年国勢調査に基づく総務省統計局による 2015 年 4 月 1 日付け補間補正人口（推定値）をもとに、Table1 にある通りサンプル割り当て数を決定した。調査期間は 2015 年 6 月

Table1 国勢調査補間補正人口に基づくサンプル割り当て数

2015 年 4 月 1 日付け補間補正人口 (単位: 万人)			
年齢階級	男性	女性	計
20～29 歳	658	623	1281
30～39 歳	806	782	1588
40～49 歳	931	914	1845
50～59 歳	770	773	1544
サンプル割り当て数 (単位: 人)			
年齢階級	男性	女性	計
20～29 歳	105	100	205
30～39 歳	129	125	254
40～49 歳	149	146	295
50～59 歳	123	123	246
合計	506	494	1000

4日から6月5日であった。

回収サンプル数は1033名、有効回答数は1027名であった。内訳はそれぞれ、20～29歳までの男性109名、女性103名、30～39歳までの男性132名、女性128名、40～49歳までの男性153名、女性151名、50～59歳までの男性125名、女性126名であった。当初の回収サンプル数が割り当て数より多いのは、マクロミル社の納品サンプル数が発注数の103%であることによる。

3-2. 調査項目

本調査全体では、次の14種類の調査項目を用いた。このうちの一部を用いて分析を行う。(1)没頭できるものの有無(4項目)、(2)将来展望(4項目)、(3)時間的・経済的・精神的ゆとり(3項目)(高橋・村田, 2011)より抜粋)、(4)健康状態(1項目)、(5)他者への関心(9項目)(久世ら, 1988)より抜粋)、(6)自尊感情尺度(10項目)(Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成, 1982)、(7)一般的信頼尺度(6項目)(山岸, 1998)、(8)ソーシャルサポート(7項目)、(9)地域活動への参加(4項目)、(10)近隣との付き合い(5項目)、(11)人間関係満足度(5項目)、(12)自殺許容(5項目)(内閣府「平成23年度自殺対策に関する意識調査」より抜粋)、(13)いのちに対する倫理観(3項目)、(14)家族関係(9項目)である。このうち、本研究で使用する項目は自殺許容、地域活動への参加、近隣との付き合い、他者への関心の4種類である。なお、年齢、性別、未既婚、子どもの有無等のフェイス項目は調査会社より提供されたデータを用いるため、調査項目の中には含まれない。

詳しい項目の内容はTable2の通りである。

Table2 調査項目の内容

他者への関心（あてはまる～あてはまらない：5件法）	
(1)	自分のことで精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕はない。
(2)	結局、人のことは自分とは関係ないことだ。
(3)	自分ひとりが努力しても世の中はよくならない。
(4)	ボランティア活動や奉仕活動などに興味や関心はない。
(5)	社会問題は自分の生活とはまったく関係ないことだと思う。
(6)	政治や社会の問題など、難しいことを考えるのはめんどうである。
(7)	何事も深く考えず、その場しのぎで過ごしている。
(8)	他人のことで自分の時間をとられたくない。
(9)	自分が損をしてまで、皆のために尽くすのはバカげたことだ。
地域活動への参加（あてはまる～あてはまらない：4件法）	
(1)	町内会、自治会活動に積極的に参加している。
(2)	地域のスポーツ団体やボランティア団体に積極的に参加している。
(3)	近所の小・中学生がどこの子どもか知っている。
(4)	祭りなど地域の行事によく参加している。
近隣との付き合い（たくさんいる・数人いる・一人二人いる・いない：4件法）	
(1)	庭先や道端で会うとよく立ち話をする人。
(2)	互いの家によく訪問し合う人。
(3)	よくおすそ分けし合う人。
(4)	家族ぐるみのつきあいをしている人。
(5)	よく一緒に外出するような関係の人。
自殺許容（そう思う～そう思わない・わからない：5件法）	
(1)	生死は最終的に本人の判断に任せるべきである。
(2)	自殺せずに生きていけば良いことがある。
(3)	責任を取って自殺することは仕方がない。
(4)	どうしようもない困難にあった人は、自殺をしてもやむを得ないときもある。
(5)	自殺は絶対にすべきではない。

4. 結果

4-1. 結果の概要

まず、各項目のクロス表を Table3～Table6 に示す。

Table3 は項目別にみた自殺許容のクロス表である。(1)、(2)、(5)は「そう思う」に回答すると自殺を許容しないことを意味し、(3)および(4)は「そう思わない」に回答すると自殺を許容しないことを意味する。「そう思う」と「ややそう思う」、あるいは「そう思わない」と「あまりそう思わない」とをあわせると、自殺許容項目全体を通しておよそ6～7割の人々が自殺を許容しない傾向にあった。

Table3 項目別にみた自殺許容

自殺許容 (N=1027)	そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない	わからない	χ^2	p
(1) 生死は最終的に本人の判断に任せるべきである。	34.7%	43.6%	12.1%	5.3%	4.4%	666.07	***
(2) 自殺せずに生きていれば良いことがある。	28.5%	40.4%	15.2%	6.7%	9.2%	414.12	***
(3) 責任を取って自殺することは仕方がない。	4.4%	10.8%	24.0%	51.5%	9.3%	744.76	***
(4) どうしようもない困難にあった人は、自殺をしてもやむを得ないときもある。	7.6%	20.5%	21.3%	39.6%	10.9%	320.41	***
(5) 自殺は絶対にすべきではない。	36.4%	26.1%	17.1%	9.8%	10.5%	260.93	***

***: $p < .001$

次に Table4 に項目別にみた地域活動への参加を示す。約半数以上の人々が地域活動に積極的に参加しているとはいえないことが分かった。なかでも(2)の地域のスポーツ団体やボランティア団体への参加は「あてはまらない」が62.8%、「どちらかというにあてはまらない」が26.2%と、合算すると9割近くの人々があてはまらない傾向にあった。一方、(1)の町内会、自

治会活動への参加は約3割近くの人々が積極的に参加している傾向にあり、4項目の中では高い割合を示した。

Table4 項目別にみた地域活動への参加

地域活動への参加 (N=1027)	あてはまる	どちらかという とあてはまる	どちらかという とあてはまらない	あてはまらない	χ^2	p
(1) 町内会、自治会活動に積極的に参加している。	4.1%	27.4%	14.1%	54.4%	586.36	***
(2) 地域のスポーツ団体やボランティア団体に積極的に参加している。	3.4%	7.6%	26.2%	62.8%	903.65	***
(3) 近所の小・中学生がどの子どもか知っている。	4.6%	17.7%	21.2%	56.5%	605.94	***
(4) 祭りなど地域の行事によく参加している。	5.2%	14.5%	27.2%	53.2%	534.70	***

***: $p < .001$

次に Table5 に項目別にみた近隣との付き合いを示す。(2)、(3)、(4)の項目は7割近くの人々が「いない」と回答した。換言すれば、7割近くの方は自分自身だけでなく家族を交えた付き合いがないことが分かった。それと比べると(1)、(5)は「いない」と回答した人の割合が約5～6割となっており、庭先や道端で立ち話をしたり、一緒に外出するような関係の方は多少なり存在していることが伺える。ただし、同居家族の有無(配偶者の有無など)が

Table5 項目別にみた近隣との付き合い

近隣との付き合い (N=1027)	たくさん いる	数人いる	一人二人 いる	いない	χ^2	p
(1) 庭先や道端で会うとよく立ち話をする人。	2.4%	17.9%	24.2%	55.4%	609.78	***
(2) 互いの家によく訪問し合う人。	1.0%	10.4%	20.7%	67.9%	1086.83	***
(3) よくおすそ分けし合う人。	1.0%	10.6%	22.2%	66.2%	1023.11	***
(4) 家族ぐるみにつきあいをしている人。	1.6%	11.1%	20.2%	67.2%	1045.84	***
(5) よく一緒に外出するような関係の人。	2.2%	14.3%	24.7%	58.7%	726.70	***

***: $p < .001$

関連しており、一人暮らし世帯は子どもがいる世帯と比べて、近隣との付き合いがほとんどなかった（表なし）。

Table6 は項目別にみた他者への関心である。「あてはまる」と回答すると他者への関心が低く、「あてはまらない」と回答すると他者への関心が高いことを意味する。おおむね他者への関心の高さ（あてはまる傾向）と他者への関心の低さ（あてはまらない傾向）とは拮抗している。ただしいくつかの項目で割合の偏りがあり、(3)の「自分ひとりが努力しても世の中はよくなるならない」は「あてはまる」と「どちらかというにあてはまる」を合算すると 55.4%となり、「あてはまらない」と「どちらかというにあてはまらない」を合算した 16.1%よりも高くなっている。同様に、(5)の「社会問題は自分

Table6 項目別にみた他者への関心

他者への関心 (N=1027)	あてはまる	どちらかというにあてはまる	どちらとも言えない	どちらかというにあてはまらない	あてはまらない	χ^2	P
(1) 自分のことで精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕はない。	6.8%	28.5%	31.2%	26.8%	6.7%	304.72	***
(2) 結局、人のことは自分とは関係ないことだ。	6.9%	24.3%	37.2%	24.3%	7.2%	343.21	***
(3) 自分ひとりが努力しても世の中はよくなるならない。	17.0%	38.4%	28.5%	12.2%	3.9%	379.69	***
(4) ボランティア活動や奉仕活動などに興味や関心はない。	13.1%	23.8%	36.8%	19.9%	6.4%	271.04	***
(5) 社会問題は自分の生活とはまったく関係ないことだと思う。	3.4%	9.6%	32.8%	38.9%	15.3%	474.68	***
(6) 政治や社会の問題など、難しいことを考えるのはめんどろである。	8.3%	23.2%	31.6%	27.4%	9.5%	229.37	***
(7) 何事も深く考えず、その場のぎで過ごしている。	5.0%	19.5%	35.7%	29.8%	10.0%	343.67	***
(8) 他人のことで自分の時間をとられたくない。	10.5%	26.8%	38.6%	18.4%	5.7%	352.29	***
(9) 自分が損をしてまで、皆のために尽くすのはバカげたことだ。	9.3%	20.2%	42.0%	21.0%	7.5%	386.88	***

***. $p < .001$

の生活とはまったく関係ないことだと思う」は「あてはまる」と「どちらか」というとあてはまる」を合算すると13.0%だが、「あてはまらない」と「どちらか」というとあてはまらない」を合算すると54.1%と割合の差は大きい。

4-2. 自殺許容を従属変数としたパス解析

以上までが調査結果の概要である。次に、[社会的要因] → [個人的要因] → [自殺許容] を明らかにするため、個人的要因である他者への関心を媒介変数とし、社会的要因（近隣との付き合い、地域活動への参加）を独立変数、自殺許容を従属変数としたパス解析を行った。これをモデルに示すとFigure1 のようになる。

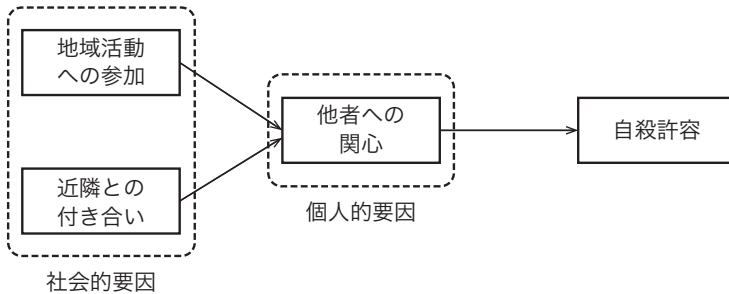


Figure1 モデル図

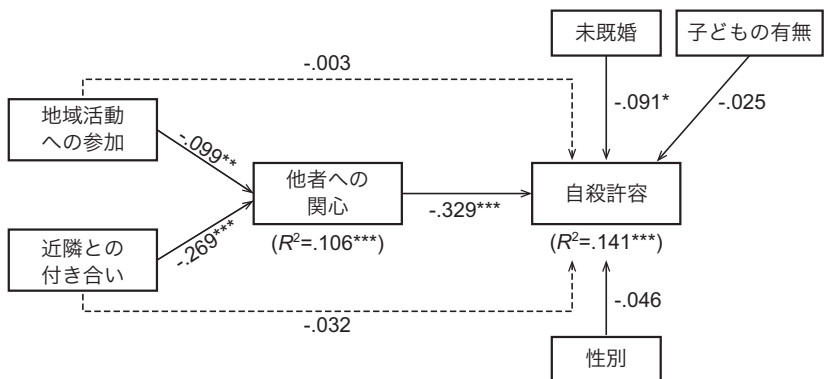
各変数の信頼係数は次の通りである。すなわち地域への参加 ($\alpha = 0.87$)、近隣との付き合い ($\alpha = 0.88$)、他者への関心 ($\alpha = 0.86$)、自殺許容 ($\alpha = 0.75$) であった。いずれも 0.7 を上回っていたため尺度の信頼性は担保されていたが、自殺許容における「生死は最終的に本人の判断に任せるべきである」という項目については安楽死を想定させる内容であった可能性があり、尺度化にあたっては除外した。除外後の自殺許容の信頼係数は 0.81 であった。なお自殺許容項目における「わからない」という選択肢は欠損値とした。なお各変数の平均と標準偏差は Table7 に示す通りである。

Table7 各変数の平均と標準偏差

	地域活動への参加	近隣との付き合い	他者への関心	自殺許容
M	6.62	7.65	26.88	7.56
SD	2.92	3.15	6.42	2.99

(注) 地域活動への参加と自殺許容は満点 16、近隣との付き合いは満点 20、他者への関心は満点 45

まず全世代の結果を Figure2 に示す。性別、未既婚の別、子どもの有無を投入してもなお、Figure1 のモデル図に示したパスは有意であった。地域活動へ参加する人、あるいは近隣との付き合いがある人ほど「他者への関心」が高く、「他者への関心」が高いほど自殺を許容しないという結果が得られた。なかでも、「他者への関心」から「自殺許容」に至るパス係数は -0.329 となり、影響力としては決して大きくはないが、パス図の中では最も自殺許容意識を抑制する方向に働くことが分かった。



*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

Figure2 全世代のパスダイアグラム

Table8 に各変数の直接効果および間接効果を示す。間接効果の有意差検定は Sobel (1982) による Sobel test および Calculation for the Sobel Test (Preacher & Leonardelli, 2010) のサイトを使用した。分析結果より、自殺許容に対する直接効果が最も大きかったのは「他者への関心」であった ($p<.001$)。他者への関心が高まると、自殺許容意識が低下することが明らかとなった。間接効果を見てみると、「地域活動への参加」は有意差が見られなかったが「近隣との付き合い」に有意差が見られた ($p<.001$)。パス係数は $-.088$ となり、近隣との付き合いがある人の方が自殺を許容しないことを意味している。これは「近隣との付き合い」は「他者への関心」を高め、それにより自殺許容意識にマイナスの影響を与えていることを意味している。ただしパス係数の大ききから、変数の影響力はそれほど大きくはなかった。

Table8 パスダイアグラムにおける直接効果と間接効果 (全世代)

目的変数 予測変数	他者への関心 ($R^2=.106^{***}$)			自殺許容 ($R^2=.141^{***}$)		
	直接効果		間接効果	直接効果		間接効果
地域活動への参加	.099	**	-	-.003		-.033
近隣との付き合い	.269	***	-	-.032		-.088 ***
他者への関心	-		-	-.329	***	-

: $p<.01$ *: $p<.001$

次に、男女別の直接効果および間接効果を Table9 に示す。これによると、男女ともに自殺許容に対する直接効果が最も大きかったのは「他者への関心」であり、男性では $-.365$ ($p<.001$)、女性では $-.292$ ($p<.001$) であった。間接効果を見てみると、男性では有意差は見られなかった。数値のみを見てみると、「地域活動への参加」の直接効果は $-.040$ 、間接効果が $-.049$ となり、間接効果の値が大きかった。「近隣との付き合い」も同様に、直接効果よりも間接効果の値が大きかった。一方女性では、「近隣との付き合い」の間接効果に有意差が見られた ($p<.01$)。直接効果が $-.066$ 、間接効果が $-.088$ であった。女性は近隣との付き合いがあることにより他者への関心が強まり、それによって自殺許容意識が低下することが示唆された。ただしパス係数の

大きさから、変数の影響力はそれほど大きくはなかった。

Table9 パスダイアグラムにおける直接効果と間接効果（全世代・男女別）

	目的変数	他者への関心 ($R^2=.087^{***}$)		自殺許容 ($R^2=.139^{***}$)	
		直接効果	間接効果	直接効果	間接効果
男性	予測変数				
	地域活動への参加	.133	*	-.040	-.049
	近隣との付き合い	.222	***	-.016	-.081
	他者への関心	-	-	-.365	***
女性	目的変数	他者への関心 ($R^2=.111^{***}$)		自殺許容 ($R^2=.104^{***}$)	
	予測変数	直接効果	間接効果	直接効果	間接効果
	地域活動への参加	.062	-	-.034	-.018
	近隣との付き合い	.302	***	-.066	-.088
	他者への関心	-	-	-.292	***

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

4.3. 世代別の検討

次に世代別に検討する。各世代の直接効果と間接効果を Table10 に示す。

Table10 パスダイアグラムにおける直接効果と間接効果（各世代）

	目的変数	他者への関心 ($R^2=.038^*$)		自殺許容 ($R^2=.084^{***}$)	
		直接効果	間接効果	直接効果	間接効果
20代	予測変数				
	地域活動への参加	-.078	-	.008	.025
	近隣との付き合い	.251	***	.022	-.080
	他者への関心	-	-	-.319	***
30代	目的変数	他者への関心 ($R^2=.120^{***}$)		自殺許容 ($R^2=.148^{***}$)	
	予測変数	直接効果	間接効果	直接効果	間接効果
	地域活動への参加	.130	†	-.081	-.045
	近隣との付き合い	.281	***	-.048	-.098
	他者への関心	-	-	-.349	***
40代	目的変数	他者への関心 ($R^2=.092^{***}$)		自殺許容 ($R^2=.111^{***}$)	
	予測変数	直接効果	間接効果	直接効果	間接効果
	地域活動への参加	.147	*	-.049	-.041
	近隣との付き合い	.209	**	-.109	-.003
	他者への関心	-	-	-.278	***
50代	目的変数	他者への関心 ($R^2=.153^{***}$)		自殺許容 ($R^2=.139^{***}$)	
	予測変数	直接効果	間接効果	直接効果	間接効果
	地域活動への参加	.084	-	.020	-.032
	近隣との付き合い	.363	***	-.024	-.139
	他者への関心	-	-	-.384	***

†: $p < .1$ *: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

これによると、各世代において自殺許容に対する直接効果が最も大きかったのは「他者への関心」であり、いずれも0.1%水準で有意差が見られた。間接効果を見てみると、30代と50代の「近隣との付き合い」に有意差が見られた。30代では、「近隣との付き合い」の直接効果が-.048、間接効果が-.098となり、間接効果に5%水準の有意差が見られた。50代でも同様に、「近隣との付き合い」の直接効果が-.024、間接効果が-.139となり、間接効果に5%水準の有意差が見られた。30代と50代の人々は、近隣との付き合いがあることで他者への関心が高まり、それにより自殺許容意識を低下させることが明らかとなった。

さらに各世代を男女別に分け、直接効果と間接効果を検討した (Table11)。

その結果、各世代・男女別において自殺許容に対する直接効果が最も大きかったのは「他者への関心」であり、それぞれ有意差が見られた。間接効果を見てみると、30代女性、50代男性および女性の「近隣との付き合い」に有意差が見られた。30代女性では、「近隣との付き合い」の直接効果が-.067、間接効果が-.094となり、10%水準の有意傾向であった。50代男性では、「近隣との付き合い」の直接効果が.057、間接効果が-.147となり、10%水準の有意傾向であった。50代女性では、「近隣との付き合い」の直接効果が-.119、間接効果が-.132となり、10%水準の有意傾向であった。これらの世代・性別では、近隣との付き合いがあると他者への関心が高まり、それにより自殺許容意識を低下させることが明らかとなった。特に50代男性では、直接効果の係数が.057と正の値であったのに対し、間接効果は-.147と負の値であった。このことから、50代男性においては「近隣との付き合い」は直接的には自殺許容意識を高める方向に作用するが、[近隣との付き合い] → [他者への関心] → [自殺許容] といった具合に「他者への関心」を媒介することで自殺許容意識を低める方向に作用する可能性が示唆された。

Table11 パスダイアグラムにおける直接効果と間接効果 (各世代・男女別)

目的変数		他者への関心 ($R^2=.023$)		自殺許容 ($R^2=.054 \dagger$)	
		直接効果	間接効果	直接効果	間接効果
20代	男性				
	地域活動への参加	.025	-	-.009	-.008
	近隣との付き合い	.211 \dagger	-	.073	-.065
	他者への関心	-	-	-.309	**
目的変数		他者への関心 ($R^2=.043 \dagger$)		自殺許容 ($R^2=.056 \dagger$)	
	女性				
地域活動への参加	-.215	-	.071	.059	
近隣との付き合い	.325 *	-	-.074	-.089	
他者への関心	-	-	-.274	*	-
目的変数		他者への関心 ($R^2=.084^{**}$)		自殺許容 ($R^2=.115^{**}$)	
30代	男性				
	地域活動への参加	.198 \dagger	-	-.065	-.071
	近隣との付き合い	.175	-	.006	-.062
	他者への関心	-	-	-.357	***
目的変数		他者への関心 ($R^2=.087^{**}$)		自殺許容 ($R^2=.101^{**}$)	
	女性				
地域活動への参加	.052	-	-.087	-.016	
近隣との付き合い	.302 **	-	-.067	-.094 \dagger	
他者への関心	-	-	-.312	**	-
目的変数		他者への関心 ($R^2=.047^*$)		自殺許容 ($R^2=.146^{***}$)	
40代	男性				
	地域活動への参加	.108	-	.008	-.037
	近隣との付き合い	.186 \dagger	-	-.166 \dagger	-.063
	他者への関心	-	-	-.339	***
目的変数		他者への関心 ($R^2=.132^{***}$)		自殺許容 ($R^2=.072^{**}$)	
	女性				
地域活動への参加	.189 \dagger	-	-.201	-.038	
近隣との付き合い	.226 *	-	.016	-.045	
他者への関心	-	-	-.200	*	-
目的変数		他者への関心 ($R^2=.148^{***}$)		自殺許容 ($R^2=.117^{**}$)	
50代	男性				
	地域活動への参加	.074	-	.002	-.029
	近隣との付き合い	.370 ***	-	.057	-.147 \dagger
	他者への関心	-	-	-.398	***
目的変数		他者への関心 ($R^2=.142^{***}$)		自殺許容 ($R^2=.153^{***}$)	
	女性				
地域活動への参加	.088	-	.048	-.033	
近隣との付き合い	.352 ***	-	-.119	-.132 \dagger	
他者への関心	-	-	-.374	***	-

\dagger : $p < .1$ * : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$

5. 考察

本研究の目的は、[社会的要因] → [個人的要因] → [自殺許容] の因果関係を検証することであった。社会的要因として、「地域活動への参加」と「近隣との付き合い」の2変数を設定し、個人的要因として「他者への関心」を設定した。全世代の結果では、社会的要因の中でも「近隣との付き合い」の間接効果に有意差が見られ、近隣との付き合いがあると他者への関心が高まり、それにより自殺許容を低減させる方向に作用していた。次いで男女別に検討したところ、女性のみ「近隣との付き合い」の間接効果に有意差があり、近隣との付き合いがあることで他者への関心が高まり、それによって自殺許容意識が低下することが明らかとなった。世代別にみた結果では、30代と50代に同様の結果が得られた。最後に世代別・男女別に検討したところ、30代女性、50代男性および50代女性に同様の結果が得られた。

これらの結果から、[社会的要因] → [個人的要因] → [自殺許容] の図式は世代や性別によってばらつきがあり、30代では女性に、50代では男女ともに有効であった。社会的要因の中でも「近隣との付き合い」が重要であることが伺えた。近隣の人々と付き合いがあることにより地域住民への関心が高まり、それにより自殺許容意識が低減するということである。世代別にみると、30代女性の場合は調査対象者の中に子育てをしている人が一定数含まれていることが考えられ、保育園・幼稚園への通園や公園での遊び等で近隣の人々との交流があることが考えられる。また50代は男女ともに有効であったことから、地域活動への参加以外に近隣の人々と交流する機会が日常的に存在する可能性が考えられる。例えば居住年数が長ければ、自ずと近隣の人々のことを知る機会もあるだろう。本調査では居住年数を尋ねる項目を設けなかったため影響関係は検証できないが、今後の検証に期待したい。

20代の結果に着目すると、社会的要因の間接効果に有意差はなく、個人的要因の「他者への関心」が自殺許容意識に直接的に作用していた。本研究では「他者への関心」に影響する要因として「地域活動への参加」と「近隣との付き合い」を設定し、そのうち「近隣との付き合い」は「他者への関

心」を有意に高める結果となったが、間接効果に有意差が出るまでには至らなかった。すなわち [近隣との付き合い] → [他者への関心] の因果関係は存在したが、[近隣との付き合い] → [他者への関心] → [自殺許容] とはならず、「他者への関心」が媒介変数としては作用しなかったということである。今後 20 代の自殺許容意識を検討するにあたっては、別の媒介変数の存在を解明することが必要であろう。

以上の知見は、今後展開されうる自殺予防対策に資するものであると考えられる。鈴木 (2015) は、若年層の自殺対策について、アウトリーチから就労支援、さらにはその後の定着までを見据えた包括的な地域支援が自殺のリスクを低減せしめる自殺予防啓発活動につながると述べている。これについて、今回の知見を鑑みれば、インフォーマル・ケアとして家族・友人・隣人などの日常における人とのつながり (杉原, 2011) を含む地域支援が、若年層の自殺対策には有効であると考えられる。また 30 代女性にみられたように、近隣との付き合いによって他者への関心が高まることで自殺許容意識が低下することから、自分自身の自殺リスクの低減として、近隣の人々とのかかわりの重要性が示唆される。はっきりと自覚された自殺企図や自殺念慮をもたない状態でも、積極的に近隣の人々と接触する機会を設けることで、自ずと自殺許容意識の低下につながり、ひいては潜在的な自殺リスクを低減させる可能性が考えられる。

今後の課題としては、自殺許容意識を尋ねる項目の精度が挙げられる。項目内容は自殺全般について尋ねるものになっており、自分自身の自殺と他者の自殺を区別していない。これについてさらなる改良が必要である。

■引用文献

Durkheim, E. (1897). *Le suicide: étude de sociologie*. Paris: Alcan.

(宮島喬 (訳) (1985). 自殺論 中央公論新社)

Giddens, A. (1977). *Studies in Social and Political Theory*. London: Hutchinson.

(宮島喬・江原由美子・森反章夫・儘田徹・本間直子・田中秀隆・百々雅子 (訳)

- (1986). 社会理論の現代像——デュルケム、ウェーバー、解釈学、エスノメソドロジー みすず書房)
- 平野孝典 (2013). 社会的統合が自殺観に与える影響 フォーラム現代社会学, **12**, 43-55.
- Joe, S., Romer, D., & Jamieson, P. E. (2007). Suicide acceptability is related to suicide planning in US adolescents and young adults. *Suicide and Life-Threatening Behavior*, **37**(2), 165-178.
- 小森田龍生 (2013). 2000年代の高自殺リスク群と男女差：既存統計資料の整理と課題抽出に向けて 専修人間科学論集社会学篇, **3**, 117-126.
- 久世敏雄・和田実・鄭曉齊・浅野敬子・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・宗方比佐子・内山伊知郎・平石賢二・大野久 (1988). 現代青年の規範意識と私生活主義について 名古屋大学教育学部紀要, **35**, 21-28.
- 内閣府 (2007). 平成 19 年度国民生活白書——つながりが築く豊かな国民生活 Retrieved from http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/01_honpen/ (November 10, 2016.)
- 内閣府自殺対策推進室 (2012). 平成 23 年度自殺対策に関する意識調査 Retrieved from http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/survey/report_h23/index_pdf.html (February 28, 2016.)
- Preacher, K. J. & Leonardelli, G. J. (2010). Calculation for the Sobel test: An interactive calculation tool for mediation tests. Retrieved from <http://quantpsy.org/sobel/sobel.htm> (March 10, 2017.)
- Renberg, E. S., & Jacobsson, L. (2003). Development of a questionnaire on attitudes towards suicide (ATTS) and its application in a Swedish population. *Suicide and Life-Threatening Behavior*, **33**(1), 52-64.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- Sobel, M. E. (1982). Asymptotic confidence intervals for indirect effects in structural equation models. *Sociological Methodology*, **13**, 290-312.
- 杉原学 (2011). 自殺予防における「地域の“つながり”の再構築」が果たす役割 21 世紀社会デザイン研究: Rikkyo journal of social design studies, **10**, 127-137.
- 鈴木晶子 (2015). 地域での自殺の予防啓発の展開 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター 科学的根拠に基づく自殺予防総合対策推進コンソーシアム準備会・若年者の自殺対策のあり方に関するワーキンググループ：若年者の自殺対策のあり方に関する報告書 pp.137-147.
- 高橋幸市・村田ひろ子 (2011). 社会への関心が低い人々の特徴：「社会と生活に関する世

論調査」から 放送研究と調査, **61**(8), 26-47.

滝澤寛子・若林佳子 (2013). 退職男性の地域活動グループの育成とグループ活動の変化からみた活動推進要因 日本健康教育学会誌, **21**(3), 236-244.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**(1), 64-68.

山岸俊男 (1998). 信頼の構造 東京大学出版会

(わたなべ・ゆき 淑徳大学大学院総合福祉研究科調査・研究助手)

What factors do provide the suicide approval?: Relation of a local community

Yuki Watanabe

In Japan, suicide has been a deep problem in society. Specifically, the suicide rate of young people (i.e., those in their 20s and 30s) tends to be significantly elevated compared to other generations.

One famous sociological study on suicide is “Le suicide” by Durkheim, which examined the relationship between suicide rates and social factors, such as belonging (or not belonging) to a social group. Other studies, in the psychology and medical fields, have studied the relationship between suicide and personal factors, such as personalities more likely to exhibit suicide attempts, suicidal ideation, and suicide approval.

However, both factors are not independent. Giddens says that suicide is the result of both social and personal factors, and that personal factors are affected by social factors. Although the only social factor referenced here is the belonging (or not belonging) to social group. Because regional connection has been weak in recent years in Japan, we should focus on not only belonging (or not) to social groups, but also to the strength of connection with the local community.

In this study, we consider the causal hypothesis that social factors regulate personal factors, and that personal factors affect suicide approval. Further, the current study aims to obtain results that contribute to suicide prevention.

We conducted an internet survey with 1027 subjects (519 males, 508

females), from 20 to 59 years of age. The composition of subjects was determined by an estimate calculated by the Statistic Bureau, Ministry of Internal Affairs and Communications, based on the 2010 census. The survey was conducted from June 4th to 5th in 2015.

We set questions concerning “participation in regional activities” and “a relationship with a neighbor” as social factors, and “interest in others” as personal factors. The questions examining suicide approval were taken from a Cabinet Office survey.

As a result of path analysis, evidence for a causal relationship was provided. The path coefficients from social factors to personal factors, and from personal factors to suicide approval were statistically significant. However, as a result of examination of direct and indirect effects regarding suicide approval, direct effects were found to be more heavily mediated by personal factors than indirect effects. Therefore, we analyzed by gender and generation and found that, for women in their 30s, men in their 50s and women in their 50s, the indirect effect of “a relationship with a neighbor” had a larger impact on decreasing suicide approval than the direct effect. Especially men in their 50s, the direct effect of “the relationship with neighbor” increased suicide approval, but the indirect effect decreased it.

From these results, the connection with the local community appears to affect suicide approval. This suggests that social connectedness is an important factor to consider when examining suicide prevention strategies. However, for people in their 20s, the connection alone does not decrease suicide approval. In the levels of suicide approval in the 20s, “interest in others” affected as direct effect, but it didn’t do as indirect effect. Thus, further studies are needed to find other factors that mediate for suicide approval.